

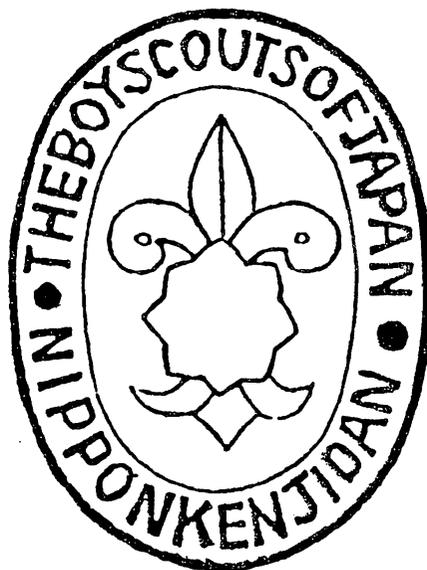
無名の初代チーフ・スカウト
—— 下田 豊松物語 ——



小町 國市 著

KUNICHI KOMACHI ©1997

無名の初代チーフ・スカウト —— 下田 豊松物語 ——



小町 國市 著

KUNIICHI KOMACHI ©1997

無名の初代チーフ・スカウト

— 下田豊松物語 —

目次

第1章	はじめに……………	7
第2章	下田豊松の生涯とボーイスカウト……………	13
第3章	第1回世界ジャンボリー大会参加……………	23
第4章	ジャンボリー余話……………	31
第5章	日本健児団結成と総長就任……………	39
第6章	無名のチーフ・スカウト秘話……………	47
第7章	ジャンボリーがもたらせた酪農と社会貢献…	61
第8章	“スカウトたちへ”朝礼の言葉……………	71
第9章	むすびに……………	79
付	○資料・写真と旅券など……………	83
	○参考文献及び資料提供者	
	「下田豊松物語」を書き終えて……………	94



須藤孝貞師

昭和十一年丁卯八月廿九日

昭和十一年八月廿九日

成人の日 八月廿九日

宇宙主義者 大極

宇宙主義

下田豊松

この書を
ボーイスカウト日本連盟設立七十五周年を慶祝し
故 先達 下田豊松先生に捧ぐ

著者

第1章 はじめに

1,はじめに

ボーイスカウト日本連盟は、1997年の本年、創立75周年を迎えた。サー・ベーデン・パウエルが20人の少年たちとブラウンシー島で実験キャンプを行った年をスカウト運動の創始の年として、世界スカウト運動は90周年を数えるに至っている。

ボーイスカウト日本連盟は、創立75周年を、ただ単に記念にして、数々のお祝いの行事を開催するのではなく、これまでの75年間のスカウト運動を検証し、21世紀に向けての青少年運動として、日本のスカウティングを再構築する出発の年としようと企画している。サー・ベーデン・パウエルが、晩年の1939年にアフリカのケニアにおいて、山を眺めながら「視野をより広く、より高く、より遠く、前を見なさい。そうすれば道が見えてくるだろう。」と世界のスカウトたちに述べています。この言葉を引用して、日本連盟は75周年のテーマを“視野をより広く”=LOOKING WIDERとしたのである。また、こののテーマであるLOOKING WIDERは1996年に開催された第34回世界スカウト会議でも主要スローガンとして、世界中の全ての国々の加盟員に対しても呼びかけられてもいるところである。

さて、日本のスカウト運動は、75周年が正式な歴史となっているが、更に検証すると、それ以前のスカウト活動と相似した少年団、あるいは健児団という名称の活動がすでに国内に存在していた。幾つかの英国からボーイスカウト運動の伝わってきたというルートがあるが、事実の検証は難しい。ひとつには、文部省から英国に派遣された教育者からの報告によるものであり、ひとつには、アメリカから来日していたキリスト教教会の牧師による紹介等とされている。横浜においては、居留する外国人の手によって組織されたスカウト運動も存在した。いずれが、正しいかは、決定的な裏付はない。しかし、日本の各地において、スカウト運動が芽生えていた時期として当時をとらえることが妥当だと思われる。

こうした時期に、北海道において健児団を組織していた35歳の在郷軍人である下田豊松という青年がいた。下田豊松は、全くの無名の地方活動家であったのだが、新聞によって、英国で第1回世界ジャンボリーが開催されることを知った。併せて、国際会議が開かれることも識ったのである。

下田豊松は、海路横浜より英国に渡り、日本代表として国際会議に出

席し、ジャンボリーに参加して、サー・ベーデン・パウエルと接見し、親交を温めあった。サー・ベーデン・パウエルが認めた日本のスカウト指導者として初の人物であり、日本のチーフ・スカウト(総長)として、その後も接せられたのであった。世界ジャンボリー開催の2年後の1922年に、日本において全国的規模で、ボーイスカウト日本連盟の前身母体である少年団日本連盟が組織されて、新たなチーフ・スカウトが選出されることとなった。

下田豊松が第1回世界ジャンボリーに参加し、チーフ・スカウトとして国際本部との交流がなかったならば、後に組織された連盟の国際加盟もスムーズには運ばなかったのではなかろうか。

歴史のなかに、記録の中に、初代のチーフ・スカウトとしては残っていない下田豊松である。しかし、その無名の初代チーフ・スカウトこそ、日本のスカウティングの世界への第一歩をしるした指導者として、パイオニアであったと思われる人物である。

日本連盟が75周年を迎えたいま、無名の初代チーフ・スカウト下田豊松の歩みを記述し、下田豊松の大きな足跡を賛え、スカウト運動に参加する全ての後に続く者たちの記憶に留めたいと願うものである。尚、

本稿の作成に当って、多くの資料をご提供いただいた、下田豊松の子息である、下田真氏に、感謝を捧げるものである。下田真氏は現在、北海道・倶知安町で農業を営んでおられることを付記する。

第2章 下田豊松の生涯とボーイスカウト

2, 下田豊松の生涯とボーイスカウト

下田豊松は、明治20年(1887年)11月7日に、北海道岩内郡御^オ銚^イ内町(元の岩内駅近隣)に父下田^{ニサプロウ}仁三郎、母スズの長男として誕生した。

下田一家は明治18年(1885年)に、石川県金沢から移住し、当初は農業を営み、後には米穀や荒物及び雑貨品の小売商を業としていた。

下田豊松は、子供の頃のことを雑誌のインタビューで次のように答えている。

「私は生れつき身体が弱く、精神状態も不安定で、いまでいうノイローゼのようなもので、学校にもほとんど登校しなかった。担任の先生に励まされ、どうにか無事に小学校を卒業することが出来たのです。函館商業(高等学校)に進学し、よき友やよき師を得て、しっかりした精神と肉体を作っておくことが大切であるということを固く信ずるようになったのです。」

いうなれば、すでにこの頃からスカウトになる要素としての精神をみずからの問いかけによって築き始めていたのであったといえる。

明治40年(1907年)に函館商業を卒業し、家業に就き商業活動に

精励する真面目な少年であった。

大正3年(1914年)に、下田豊松の住む岩内を訪ずれた帝国陸軍第7師団の宇都宮太郎陸軍中将のすすめで少年団の結成を試みるに至った。大正4年(1915年)には宇都宮中将は旭川に少年団を結成させている。下田は、宇都宮中将の指導で、少年団の結成のため、あらゆる努力をしたが、実際には反対も数多くあったのである。

屈することもなく努力を重ね、ついに行政当局である岩内教育会長の上島職や、三井鉱山所長の大岩寅吉等の応援で500人近い団員によって岩内少年団を大正5年(1916年)6月28日に発足せしめたのである。

下田豊松は、岩内少年団の総帥として団長に就任した。北海道では旭川に次いで2番目の少年団発足との記録が残されている。当時は、少年団の活動の多くは、学校の教師による指導や、青年団の下部組織としての運営、在郷軍人による軍国主義の下の愛国少年の育成に主眼が置かれていた。

下田豊松は在郷軍人であり、商業を営む傍らの純粋な皇国少年の育成を志していたのである。真のボランティアであった。

岩内少年団を組織して団長に就任し、模索の中で4年の歳月が経過す

る。そうした折にたまたま目にした東京新聞で、英国の第1回世界スカウトジャンボリーの開催を知ったのであった。下田は、どこからの資金的応援を得ることもなく自費での参加を決意し、父下田仁三郎の理解を得て、渡英したのである。当時の日本円にして、1万円の経費を自らの労働によってまかなったのである。この頃は外国に渡航することは、政府の高官や、商社マンがほとんどで、一般の国民が海外の行事や観光にいくという慣行もない時代であった。函館商業に学んだ下田は、若干ではあるが、英語の読み書きが出来たことと、世界のスカウト活動、特に英国の運動の現状をこの目で見てみたいという一心であったのであろうか。持前の好奇心とパイオニア精神が、まだ見ぬ国への憧れへとかりたてたのである。

大正9年(1920年)5月11日に横浜港より鎌倉丸で、東京少年団の小柴博と同行、英国に出発する。船上で偶然知り得た鈴木少年(横浜の外国人スカウト隊々員・父日本人、母英国人)と共に、英国ロンドンのオリンピア広場で開催された第1回世界ジャンボリーに参加する。

7月25日～29日迄は、ロンドン・オリンピアに於ける第1回少年団国際会議にも参席している。10月18日に帰国し、その後は、帰国報告

と少年団結成を訴えて、日本全国を行脚し、講演回数は100回を超えた。

大正10年（1921年）に、少年団の全国統一組織「日本健児団」＝(BOY SCOUT OF JAPAN) を創設し正式加盟国として、英国の国際本部に登録する。下田豊松は1920年の第1回世界ジャンボリーに参加以来日本のチーフスカウトとして、サー・ベーデン・パウエルはじめ、多くの諸外国連盟から認知はされていたが、名実共に初代のチーフスカウト(総長)となったのであった。

大正11年(1922年)に、静岡で開催された第1回全国少年団大会と時を同じくして、日本国内各地より123名の首脳代表が集結し、規約草案の可決をみた。新たな全国組織として、少年団日本連盟が発足したのである。初代総裁に後藤新平男爵、理事長に二荒芳徳伯爵が推戴された。

下田は、新たな少年団日本連盟の発足に伴い、永年に亘って築いてきた日本健児団を率いて、新発足の日本連盟の発展に進んで協力し、少年団日本連盟の評議員となった。英国の国際本部は、継続登録した新組織においての新たな総裁(チーフ・スカウト)が後藤新平とも知らず、第

2回の国際ジャンボリー(1924年)の招待状は、下田豊松の日本健児団に送られてきたのであった。(註:招待状は1923年秋に下田に届いている)下田は少年団日本連盟に37名の参加のプロモートをし、北海道からも4名のスカウト達を派遣する為、大いなる尽力をしたのである。その後の下田豊松は、少年団日本連盟のひとりの役員として、卒先し組織の拡充に努めた。北海道後志^{シリベン}少年団結成もそのひとつの実績である。

第2次世界大戦の戦火に見舞われた日本は、戦時体制中に、少年団日本連盟も解体され、他の青少年団体との合同を余儀なくされた。大戦後、日本連盟はいち早く国際連盟復帰(昭和25年・1950年)を果し、焼土の中から青少年の健全育成に向けて、出発した。

下田豊松は、昭和25年(1950年)に、ボーイスカウト日本連盟及び北海道連盟の参与となっている。昭和39年(1964年)76歳の時にすでにボーイスカウト日本連盟に於いて「先達」という称号が贈られている。先達の称号は、日本連盟の総コミッショナーや、事務局長をした方々、あるいは、教育分野でのリーダートレーナー(かつてのディプティ

一・キャンプ・チーフ)などの要職経験者であり、75周年を経た日本連盟でも数少ない。高嶺の花のような高位なる尊称である。下田豊松の歩みとしては当然な尊称の「先達」ではあるが、戦前・戦後の一時期の活動がとだけただけに一部では、若干の批評めいたこともあったようである。

下田豊松に授与されたボーイスカウト日本連盟等からの有功記章は次の通りである。

昭和31年(1956年)日本連盟感謝章

昭細37年(1962年)日本連盟たか(鷹)章

昭和38年(1963年)北海道連盟有功章

昭和47年(1972年)50周年記念表彰

また、日本国政府からの褒章と叙勲は次の通りである。

昭和15年(1940年)勲六等瑞宝章

昭和37年(1962年)藍綬褒章(BLUE RIBBON MEDAL)

更には、第2次世界大戦後の一時期、日本国外からの引揚者の援護に当

り、後志に授産場シリベシを開設し地域社会に貢献したのである。昭和41年(1

966年)には北海道・倶知安町クッチャンの第1回特別功労者として表彰の榮譽を受けた。いうなれば、自治功労者であり、名譽ある地域功労者として永い間の数々の徳行が多く町の尊敬と議会の議決に基づいて表彰となったといえる。

昭和57年10月10日(1982年)下田豊松は、94歳の天寿を全うして浄土に還った。北海道の大地をこよなく愛し、自然との共存を考えた人生であった。精神論者として「大宇宙」を唱えもした。全人格的陶冶あつての公民であることと、よき社会人であることを常に提唱した。健児団の発団、英国への渡航など、先見性にたけているその行動と人生哲学は、まるで雪の結晶のプリズムのように光り輝く人生であった。

檜の木々や落葉樹が、すでに紅葉となって北海道の大地を染めはじめている。下田豊松は冬を迎える大地に深い眠りへ、永遠のスカウトとしての旅へ向つたのであつた。

法名は「顕徳院積淨豊」である。果てしない行脚は、健児団の初代チーフ・スカウトとして日本連盟先達としての誇りと榮譽をもにないながら、遠くこだまして聞えるあの1920年に参加した第1回世界ジャンボリーでの行進にあわせた「日本代表」のコールと拍手の渦の中の歩みのように……………。

第3章 第1回世界ジャンボリー大会参加

3, 第1回世界ジャンボリー大会

下田豊松が大正5年（1916年）に北海道岩内に少年団を結成し、4年後の大正9年（1920年）に、東京新聞の報道によって、その年8月に英国ロンドン郊外のオリンピアで第1回世界ジャンボリーが開かれることを知った。

1907年（明治40年）8月にサー・ベーデン・パウエルが、ブラウンジー島で20人の少年達と実験キャンプがなされてから10数年しか経っていない。1908年にサー・ベーデン・パウエルが著した「SCOUTING FOR BOYS」（少年のための斥候法）が、日本に取り寄せられたのが1909年（明治42年）であり、邦訳が榎本恒太郎の手によってなされ「少年兵団」として出版をみたのが、1910年（明治43年）であった。下田がこの書を読んでいたか否かは、定かではない。

新聞社を通じて、下田豊松は、東京で大正2年（1913年）から少年軍組織（東京少年団の前身）で活動する小柴博の知遇を得る。

下田豊松は岩内少年団長として自費でこの世界ジャンボリーに参加する

ことを決意したのであった。

35歳の下田は、ボーイスカウトの活動そのものの知識も浅く、ジャンボリーの意義すらも未だ解らない状況でありながら、この大任を果たすために命がけで取り組んでいくことを考えていたのである。

1975年（昭和50年）に「羽ばたけ北海道」—北海道回想録2—が発刊され、この本に下田豊松は“ボーイスカウトの先達”として紹介されている。その中で、下田は世界ジャンボリーに参加した回想を次のようにしている。『横浜を出航した鎌倉丸の船中で、ボーイスカウトの服装をした少年に出会った。少年の名は鈴木慎君といい、英名でリチャードといった。父を日本人、母を外国人とした二世のリチャード鈴木と、その家族との船中での妙な出会いだった。ジャンボリーに参加する日本少年が誕生した。食事のマナーやダンスを鈴木少年の母親から教えてもらったり、妹のネーティや弟のアーサルらとの交流は長い航海を退屈なものだとさせなかった。愛情あふれる誠に楽しいものであった。』と述べている。

ロンドンに着いてから、鈴木少年家族への御礼にと、日本人倶楽部への招待を計画し、迎えに行った際に、スコットランドから娘や孫に逢いに

来ていたおばあさんとの会話には、外国にいるような気がしない情愛が在ったと伝えられている。下田に会うなり謝礼を述べ、来訪を歓迎し、『旅行の安全のおまじないの草木』を下さったのだ。このことに対し、下田は『日本の母親からもお守りをもらって来ている上に、英国の婦人からもお守りをいただくとは、まるで異国にも母親が出来たようです。ありがとうございます。』と感謝を表したということだ。相好をくずして喜んでくれたことが忘れられない思い出だと数十年を経ても、昨日のように語る下田であった。

ロンドンに於ける下田豊松そして同行の小柴博の行動と交流を回想のなかから追ってみると次のようなことが挙げられる。先ず伊丹松雄氏を訪ねると、伊丹の紹介で田中静彦氏を通訳兼案内役としてつけてくれた。田中氏の知人の杉浦氏は、英国の義勇隊に志願し、第1次世界大戦に従軍した猛者である。この変り種の日本人が篤志家として飛び込んできて、ボーイスカウト国際会議の通訳と、議案提案の諸手続きに力を貸してくれ、大助かりとなった。田中氏との知己が、大任を果たさせてくれた、田中氏は尊い恩人というべき敬愛すべき人であると述べられている。

英国のボーイスカウト本部へ表敬訪問した際の印象は、興味深い。1

912年（大正元年）に、ペテロの啓示によつての、国際旅行で英国を
でて、アメリカからパナマを経て、日本に立寄っているサー・ベーデン・
パウエルである。応接室には、軍服姿の東郷平八郎と乃木希典両將軍の
肖像面と会津白虎隊自刃の図の3つの額が掲げられていたのには、さす
がの下田も驚いたとのことである。サー・ベーデン・パウエルと下田
が交した会話は、下田が「私は、はるばる日本からボーイスカウト精神
を体得しに参りました」と述べると、「ボーイスカウトでは日本の武士
道精神も参考にし、取り入れているのだから、日本のみなさんの精神こ
そスカウト精神で、そちらの方が本場ではないか」と賛辞を惜しみなく
して下さったのだという。更に下田が『英国の騎士道と日本の武士道
とを評し、合わせて、ジエントルマンシップもご教示賜りたいのです。』
と申し上げると、サー・ベーデン・パウエルは満面に喜びの色を浮べ、握
手と固い友情をと歓迎の答礼をされたという。確かに、サー・ベーデン・
パウエルは、日本を訪問の際に東京高輪の泉岳寺で赤穂四十七士の墓や、
日光東照宮、京都では、二条城や知恩院を観光し、日本人の精神構造や、
宗教心という文化にふれている。スカウティング・フォア・ボーイズの
初期の文中では、乃木將軍の二人の息子たちの戦死と、乃木將軍の武士

道精神等をもとりあげているだけに、下田に対しての会話のやりとりの中での日本人の精神賛辞は単なる社交辞令だけでなかったと考えられるのである。ジャンボリー期間中も、終始、会場で顔を合わせ、いろいろと来客である下田らに教えを施してくれたという。サー・ベーデン・パウエルは、軍隊からリタイアしてすでに12年経っており、当時63歳に達していた。第1回世界ジャンボリーに参加した国は34カ国、スカウト数は6,000人を数えるに至っていた。この大会で、世界の総長（チーフ・スカウト・オブ・ザ・ワールド）に推戴されたのである。ジャンボリーの数々のイベント、国際交流、キャンピング等々、全てが新たな見聞であった下田豊松は、カルチャーショックを受けると同時に、日本のスカウトたちにも、国際水準にかなうスカウティングを伝達しなければならないと心に誓ったのである。

下田と小柴は、英国に於いて、スカウトユニフォームの新調をし、国際会議参加の記念に写真入りのポスト・カードを作製している。77年以前の当時のポスト・カードはすでにセピア色に変色している。しかし、下田らが持ち帰って来たスカウティングの原則と世界ジャンボリーに参加した力強い、飛躍的第一歩の足跡は風化することもなく、脈々と運動

の継続の基となっているのである。

第4章 ジャンボリー余話

4, ジャンボリー余話

下田豊松のジャンボリー参加にまつわる経緯については前章で記述したので、回想のなかから幾つかの余話をまとめてみたい。ジャンボリー開催前には、数々のレセプションが開かれ、昼夜を問わずに招待が舞い込むのだった。ジャンボリーの大会委員長の職にあるマルチン氏は、多忙にもかかわらず同行して下さり、案内やら、国際交流のあり方をいろいろと指導して下さっている。

いよいよジャンボリーの開会式当日、会場で、サー・ベーデン・パウエルの大催者あいさつに続き、参加国の紹介に入った。何と東洋の日本が一番目にコールされたではないか。喜びと感激はひとしおのものであった。下田は、「幾多の苦難を越えて、はるばると海を渡って来た」ことの意義がこれ程までに国境を越え、人種を越えて歓迎されているのだと実感したのだった。行進には、日章旗を鈴木少年が奉持し旗手を務め、シャム国（現タイ王国）やイタリアのスカウトらに友情参加を願った「JAPAN」のプラカードが堂々と進んでいく。スカウト1名、指導者2名の日本代表に加えて数人の外国人スカウトが、「JAPAN」に手を差しのべてくれた行進だった。鈴木少年の

キビキビとした動作と、ひとなつこい性格は、大会参加者の間で人気の的となった。在留邦人の伊丹松雄氏、今村均氏、田中静彦氏、本間雅晴氏とその他の方々は、鈴木少年に時計を贈ってその労をねぎらい、感激を共有したのであった。

8月1日の日曜日には、ウエストミンスター寺院において礼拝をした後、ロンドン市内の行進のイベントに参加した。バッキンガム宮殿前のデモンストレーションは緊張を極めたようである。沿道からは、歓呼の声がいたるところから浴びせられ、「JAPAN」、「JAPAN」の連呼が渦まく、答礼する間もなく群集の声は高まり、「日本万歳」の大合唱が果てしなく続くのであった。ひとりの貴婦人は車の上に立ち上って、日傘を振りあげながら「JAPAN」、「JAPAN」と連呼し、熱狂的な歓迎を示してくれている。下田は感動の極に達した。在留邦人の中には、日本からの参加を知らずに沿道で行進を見物していた人も多く、下田達日本代表が通過する様を見て、感きわまった面持ちで大歓迎の拍手と声を発していた。後にも先にも下田は、この行進の感激は生涯忘れ得ぬ思い出のひとつだと語っている。ジャンボリ一期間中も諸外国のスカウトたちから署名のおねだりが多く、交

換のピンやバッジは、またたく間に無くなる有様だった。

下田の倫敦(ロンドン)からの手紙を掲載した古い新聞記事によると、「英国紳士を招待して日本食をふるまう。倫敦に於ける岩内の下田少年団長の設宴」とある。

サー・ベーデン・パウエルや、大会委員長のマルチン氏と共に下田がロンドンで作った日本食のメニューはどのようなものだったのか興味のあるところである。

下田は、富士山の絵と日の丸を書いて署名した。下田が持参した名刺には、“宇宙主義者大極、大日本帝国”と書かれていたのもグローバル主義を唱える人柄の一面が見出される。英国で作った名刺には“COMMISSIONER OF DAI NIPPON SHONENDAN, TOYOMATSU SHIMODA, と書かれ隅の方に“JAPAN”と小さく記されているのだった。

大会はまたたく間に閉会式の8月7日を迎えた。オリンピアの会場に集まったスカウト群集は数万人は居たであろう。厳粛なセレモニーと歓喜の渦は最高潮に達した。会場をとりまく熱狂もすさまじく、どうなるものかと下田は見守った。別れを告げる時間が迫ってきた中で、各国代表はサー・ベーデン・パウエルと大会長のマルチン氏の前に進

み出てあいさつを交換する。日本の出番となって、下田は鈴木少年といねいに挨拶し、おごそかにスカウト旗に向かって敬礼をした。その静かな動作と予期せぬふるまいに、サー・ベーデン・パウエルはたじろぎ一步さがりながら答礼されたのであった。見守る満場のスカウトと群集の拍手と喝采はなりやまずの風情で、鈴木少年は目に涙を浮かべ感激の表情を表したのであった。

下田には一国代表者一名に授与されるジャンボリー参加記念章がマルチン氏の手ずから胸につけられた。

サー・ベーデン・パウエルは、下田に対し握手をしつつ、4年後の第2回世界ジャンボリーには日本から50人程の派遣を要請されたのでした。その要請を具現し、貫徹しようと真剣な面持ちで了承し、日本の健児団の行手に対し燃えさかる炎のような情熱をほとぼらせたのであった。下田は、ジャンボリーを通じて、そして創始者サー・ベーデン・パウエルとの親密なる人間関係を得て、スカウティングを体得し帰国したのである。

第5章 チーフスカウト 日本健児団の結成と総長就任

5, 日本健児団の結成と^{チーフスカウト}総長就任

下田豊松が、多くの見聞を得て小柴博とロンドンより帰国したのは1920年(大正9年)10月18日のことであった。5月11日の出国から実に5ヶ月と1週間となる。薫風を受けた旅立ちも、もはや初秋の風が吹く実りの季節へと推移しているのである。下田は、日本に立派なボーイスカウトを組織し、国内外に誇れる生き生きとした運動の展開を繰り広げたいという熱望をいただいていた。帰国報告には当時日本国民の崇敬の的である湊川神社に参拝し、誓いを新たにすることがあった。(注 湊川神社は楠公を祭神とする神社である)

故郷岩内に戻ってからは、ボーイスカウト運動の意義と、国際世界ジャンボリーに参加した体験講演を100回を越えて行い、広く同志を求めた。講演地は、地元の岩内、倶知安、小樽、札幌から東京に至るといふ、講演の旅を繰り返したのである。自らが団長を務めていた岩内少年団は英国のボーイスカウトの訓練体系に相似していたという確信もあってか、下田の行動に拍車がかかっていた。

日本の全国的組織が未結成の時代でもあつたのか、サー・バーデン・パウエルとの会談の際に「何か連絡するにも、何処へ知らせる

べきか」という問いを思い起し、その国際事務局を岩内の自宅に置いた。下田は自費で国際登録をしたのである。1921年に登録されてからは、“CHEEF SCOUT SHIMODA, IWANAI HOKKAIDO JAPAN”の封書がロンドンから送られてくるようになった。

下田も度々、英国ロンドンの国際本部に宛て手紙や写真、各種行事報告を送っている。

サー・ベーデン・パウエルからの手紙や、家族のクリスマス・カードなどが郵送されている事実が存在する。こうした資料は、下田の手によって克明に記録され、保存されているのだが、日本のボーイスカウトの公の歴史においては、今迄公開されたことが無かった。

後に渡航しサー・ベーデン・パウエルの訓練所（ギルウエル・トレーニング・センター）入所した、佐野常羽や笹川幹らのもとに送られた書状などの存在のあることは、スカウト史を研究する人々において確認されているが、スカウト関係者では日本における交信第一号は下田豊松と断定しても差しつかえない事実であろう。下田は、後日になって、「はなはだ僭越とは思ったが日本のチーフ・スカウトと称した」

と述懐しているが、当時すでに「世界的つながりを持たない少年団では何ら意味がない」と考えた先覚者的発想があったからである。

一方、国際世界ジャンボリーに同行した小柴博（1884-1925）は、帰国後の1923年（大正12年）に「日本の少年団」を著している。小柴は東京少年団の草創期においては忘れることの出来ない人物である。だが、小柴は活動を軌道にのせるまでには苦難や迫害を受けている。その批判には「名誉を独占しようとしている」とか、「子供を食いものにしている」等々であった。小柴は東京少年団の訓練そのものを、全てボーイスカウト流訓練体系にする意志は薄かったようである。修養団との深い関りからか、精神面での訓練というか教育に力を注いでいた面が随所に伺える。一概に小柴と下田の対比は出来ないが、下田を「動」の人と評するならば、小柴は「静」と評することが出来よう。ジャンボリー参加後、わずか5年後に41歳の若年で死去している。志半ばで小柴は、少年団日本連盟が発足して未だ日の浅い昭和の元号が制定された年に没した。下田と小柴との友情は厚く、小柴が長生きしていたならば中央で活躍する小柴と北海道という地方で活躍する下田との連携は更に日本のスカウト活動に大きな寄与をもたらしたものであろう。

「借越ながら日本のチーフ・スカウト」を名乗ったという謙虚な人柄の下田だが、「動」の歩みは、日本健児団の創設にある。すなわちボーイ・スカウト・オブ・ジャパンの創設こそ、サー・ベーデン・パウエルとの約束を果たした律儀な下田の堅実な歩みの一過程でもある。資料としての「日本健児団設立ニ際シテ」（大正十年一月一日＝1921年）や、「日本健児団」のプリント類には下田豊松が創立者として記述されている。

要約した項目を列記すると、創設、要綱、宣誓、団規十則、徽章、方法、機関が示されている。事務所は北海道仮事務所とし“札幌区南二条西一丁目十三番地創成橋畔”電話は1772番となっている。

「日本健児団」のプリントから、貴重な部分を再掲してみたい。英国の規約集を一部参考として、下田の組織概念が織り込まれ、文章化されたものとして興味があるものである。

「機関」の部分などは簡素な体系だが、下田の独自の考えの下に考案されたものと思われる。

○要綱

我が団員は為すべき総ての条件として、健全なる身体を保有しなければ

ばならない。

而して未知の運命を繋ぐ要求的観念から出発しなければならない。

而して其の時代の空気を、最も正しい瞳で見なければならない。

而して我が日本をして合理的安全に育ててゆくための義務を忘れてはならない。

而して各自の個性が正しき人生を作り出す為の努力を恒に続けなければならない。

而して人類の幸福増進の為に真愛を捧げなければならない。

○宣誓

一、吾々は国君を尊び、祖国を愛します。

一、吾々は吾々を育てて呉れるものを敬います。

一、吾々は勇しく行為して、互に援け合います。

一、吾々は何時も正しいことに向かって歩みます。

一、吾々は吾々を護って呉れる組織に感謝します。

○団規十則

①誓約 ②誠実 ③救助 ④友誼 ⑤礼讓 ⑥慈心 ⑦服従 ⑧快活 ⑨儉約

⑩純潔

○徽章

玉＝愛の象徴、剣＝力の象徴、鏡＝智の象徴

愛は換言すれば理解、剣は換言すれば自信、智は換言すれば批判

玉、剣、鏡の渾融＝全的人格

○方法

一、体育、運動、遠足、行軍等

一、心育、実地見学、講話、雑誌等

(注、原文は旧仮名づかい及び旧漢字であり一部現代用語とした)

以上だが、下田が「日本健児団」を全国組織の団体に育成すべく試みた試金石の広報活動の端緒の概要である。この一片の全紙（B4版2枚分のサイズ）には、下田の少年団への情熱の全てが凝縮されていると断言できる。徽章の制定は意匠登録を行い英国の国際本部にも送付されている。後に、下田はこの徽章を、少年団日本連盟に譲り、継続して使用され、今日使われているボーイスカウト日本連盟の徽章の原型をなしていることを知る人は少ない。

下田の作成した「宣誓」と「団規十則」は、今日的には、「ちかい」と「おきて」になるところである。「宣誓」の文語中には、天皇という文字はないが国君としての表現がある。

この点では忠君愛国の精神が示されているところである。そして、「団規十則」は英国流のスカウト・ローが邦文訳化された部分が随所にあると分析することができる。しかし、「班制度」や「進歩制度」、「技能章」制度にふれられてはいない。

「標語」も存在していないが、後年、下田は邦訳に苦心したというが「BE PREPARED」を「そなえよ 常に」とすることも試みている。

総じては、下田の独創の域ではあるが、社会教育としてのボーイスカウト活動の重要性を説いていることにおいては、江湖に問う真摯なる姿が目立つのである。

大正十年一月一日付の小樽新聞では、下田は、「学校のみ委ぬべきではない少年の「教育と訓練」と題して次のようにも述べている。

『国際少年団競技(注 ジャンボリー)を見て何れの団員もその体格が立派で訓練のよく行き届いていることに驚いた。(中略)第二の国民たる少年の教育及び訓練については朝野の協力が必要である。(中略)就中英国のボーイスカウト及びウルフカブ等民間の意向によって起れる団体である。(中略)有用の国民たるべき訓練をなしつつある事実を目

覚ましくも、亦頼もしきものがある。』としている。『綱領なるものを見るに曰く、「少年の情操を陶冶し、観察力、服従心及び自負心を養成し、憂国心、義侠心、愛他心を涵養し、以って善良なる市民を育成し併せて体格の向上を計り保健の実をあぐるにあり』」とも述べ、すでに「善良なる市民の育成」を提唱している。

下田の「日本健児団」の創設と自らの名乗ったチーフ・スカウト・オブ・ジャパンには功名心があつてのことではなかつたことを伺い知ることが出来る。北海道に在住する下田には、今日ほどの情報化社会に生きていたならまだしも、純粹にサー・ベーデン・パウエルとの約束を守り、ボーイスカウト運動を日本において適応する型で組織を拡張することに奔走した結果、自らが先頭に立つという気概が、結果的に「チーフ・スカウト」の冠名が付いたと言い得るのではなからうか。地方に生きた下田は、その後この「チーフ・スカウト」の座をも、あっさりと他に譲り、日本のスカウト組織を国際的機関に初登録した功績をも、霧の中に置いて、黙々と自分に課せられた活動に汗を流すのであった。

第6章 無名の初代チーフ・スカウト秘話

6, 無名の初代チーフスカウト秘話

下田が、「日本健児団」を創設し、ボーイスカウト運動を日本全国に展開する最中、大正10年(1921年)5月に、渡欧中の皇太子殿下(昭和天皇)が、英国エジンバラで、ボーイスカウトを親閲され、親しくサー・ベーデン・パウエルに会見したという報道がなされたのである。感激した下田は東宮侍従武官長、及びサー・ベーデン・パウエルに喜びの祝電を発している。

大正11年(1922年)7月13日から3日間、北海道巡幸の皇太子殿下をお迎えして、北海道ジャンボリーを開催した。下田は大会実行委員長となり、月寒連隊の会場に全道から500名の健児の参加によって、親しく殿下のご親閲をいただいたのである。7月14日の午後2時30分から、岩内少年団の教練、浦臼・帯広少年団の体操、小沢健児団の人梯子、各団代表の少年相撲など、元気な健児たちの意気を示したのであった。殿下が国内のスカウトを親閲された初の大会といえる北海道ジャンボリーである。

このジャンボリーを契機として北海道内に大正12年6月30日北海道少年団連盟が結成され、加盟団25ヶ団、団員約10,000名と

称せられる程に、スカウト運動は大地にその根を張るようになったのである。又、大正14年9月21日には岩内港の大はしけを会場に、海拓健児団の発団式も行っている。海拓健児団は、後の海洋少年団のさきがけとなったシースカウトのグループである。

下田が、日本健児団を結成する以前の大正8年（1919年）当時、東京少年団（大正3年9月発足）を中心とする大日本少年団には33ヶ団の少年団が加わっていた。岩内少年団、旭川少年団、東倶知安少年団の3ヶ団が、すでに北海道には存在していたことになる。

やがて、全国的に少年団活動の統一、結成の気運が高まり、種々の事情から、大正10年11月（1921年）に少年団静岡県連盟の発足がされ、翌大正11年4月13日～14日に全国少年団首脳者会議、すなわち全国少年団大会を静岡にて開催した。静岡連盟提出の「少年団日本連盟を組織すること」の議案は、尾崎元次郎（静岡少年団長・元静岡市長）議長の下に、123人もの首脳らによって議決された。

下田と共に英国の世界スカウトジャンボリーに参加した小柴も参加していた。小柴は日本連盟規約の草案を作る12名の委員の1人として就任した。後に総長となった三島通陽も12人の中に名を連ねていた。

この日を以って、少年団日本連盟が結成された。

下田が発団させ、自らが団長となっていた岩内少年団は、歴史をたどれば、大日本少年団への加盟、日本健児団での中心的役割をにない、大同団結した少年団日本連盟への加盟と揺籃時代および日本の少年団活動の創草期のなかで、目まぐるしく歩まなければならない道程を経たのであったと言える。こうして、国際的には、“ボーイスカウト・オブ・ジャパン”の“チーフ・スカウト”であった下田豊松は、新たな少年団日本連盟においての役職は評議員にしか遇されぬ役割が与えられたに過ぎなかった。

ボーイスカウト日本連盟の発足75年を経た今日、又、下田豊松が天寿を全うして死去(1982年・昭和57年10月10日、94歳)してから15年を経たなかで、新たに下田の日記を整理した子息である下田真氏が発見した「健児団運動秘話」と書かれたメモが残されていたことが判明した。下田家の了解を得たので、メモも公開をし、新たな史実として、遠い過去に消え失せようとしていた下田豊松の書き残した事実を、「無名のチーフ・スカウト秘話」として全文を掲載するものである。

《健児団運動秘話》

○渡欧出発

世界大会出席は決死の覚悟にて、身命を国家に捧げ、大乘孝道に生き、忠誠を尽さんとす。父は病床にあり、医師は危篤と云うも、母の了解の許に、父に面会せず乗車、弟喜久三に、父が死の時はロンドンへ打電せよ、家運が倒壊すとも、知らずに及ばずと云いおきたり。ロンドンにて受けし電報は「チチゼンカイ」と。天佑なる哉。船中での鈴木母子との出会いも天佑であった。

○ロンドンにて

八月一日、「ウエストミンスター アベー」にて祈祷祭を終えて、宣伝行列にロンドン市中を練り歩く。気分最高で一步一步足跡を残しつつ「バッキンガム宮殿」を通る頃最高潮に達する。ジャパン、ジャパンの連呼ばかりか日本ビイキの外人婆さんが、自動車の上に立ち上がり、コウモリ傘を振り上げての熱狂ぶりに感動した。日本人三人に会った、みんな泣いて喜んだ。その中の一人は、原田健氏（新渡戸博士の秘書、博士にはロンドンで教えを受けた）で、日本人は居らぬと聞いていたので、感激と肩身が広がったことで泣けたと感想を述べられた。

ジャンボリー開会式会場では、数万人の前に呼び出され、握手と感謝

の辞を受け、更に中将いわく「次期大会には五十名出席せしめよ」と。

冷汗をかき乍ら潔く受諾せり。

○ボーイスカウトの和訳

日本人には明治維新鹿児島健児の社が使用した「健児」が最も善良に響く。不良少年の語はあっても、不良健児の語は無い。依って「健児」「健児団」と訳す。三島子爵に会見の際、この話をなしたるも、賛成せざりしに、後になって後藤子爵が「健児(コンデー)」が良いと云ったとて、俄に健児信者になって、「少年団研究」に僕の云った事を、自分の発見の様に意見発表した。笑止。

○標語(モットー)

B-P著『SCOUTING FOR BOYS』を精読する中、『BE PREPARED』をどう表現したら良いか考えたが、従来の訳にこだわらず『そなへよ つねに』とし、日本健児団及び真人運動の標語は、『備へよ 愛せよ 援けよ 常に』を使用した。『そなへよ つねに』は後発の日本連盟もそのまま使用した。

○健児徽章の考案

形は英国B. S. A. に似せたるも、日本人に印象の深い三種の神器を図案化して日本精神を心とし、意匠登録した。

所が、三島子爵は三種章を美術学校の先生の考案と新聞に発表してしまった。僕は二荒伯爵を通じ今上陛下へ、訪英途上の皇太子殿下へは、奈良東宮武官長を通じて、『日本健児団運動』と『健児徽章』を献上した。

夫々ご覧遊ばされたとの事、二荒伯爵も帰朝後見られて、大変喜んで頂いた。三島子爵はこの間の事情を十分知っているのです、彼の弥栄ボーイスカウトの徽章には一時鏡の代わりに日の丸を入れて用いられたり。

連盟は新聞発表後、意匠登録出願したがはねられたので、後藤子爵来道の際、芦谷泰造氏（弥栄BS）を連れてこられ、氏より懐柔交渉を倶知安南河旅館にて受けたが断る。

札幌より宮尾氏（注 北海道長官、後藤子爵の一の子分と云われ、震災後、後藤子爵が帝都復興院総裁になり、請われて副総裁になる）を通じて、後藤子爵の召集電報を受けたり。後藤子爵は政治倫理運動で来道の為、僕は行かず、青少年の味方を以て任ずる健児団運動との混同を避けたり。

後藤子爵の帰途、倶知安より夜の急行に乗り込み、大沼にて氏と面会、函館迄快談し連絡船に送って帰俱、再び芦谷氏と会談す。後藤子と会

談中、僕は人の運動から地の運動に入るべく、デンマークから健児が帰ると、それなりの施設を考えていると申せしに賛成せられ、時々私の所へ遊びに来るように云われたので、こちらにもシンプルで来られたい、政治の倫理化運動や大名行列は御免蒙ると申したり。同席の永田秀次郎氏は嫌な顔をしていた。

徽章の意匠については、その後二荒氏の懇請、高島平三郎氏の仲介もあり、日本連盟へ無償で譲った。連盟は晴れて三種章の使用が出来る事になる。

○第二回世界ジャンボリーの公式通知は日本健児団にて受けたり。

文部省に少年団日本連盟を訪れ、先にパウエル中将与五〇名の出席の約束ある故、中央にて計画せられたい、出来ぬなら私がやると申し入れた。

後に細野浩三氏来道の際会いたるに、文部省では北海道の下田が脅迫に来たと騒いだとの事。

東京では案がまとまらず、愈々華族会館で後藤子爵を招いて最後の決定をする事になり三島子爵より是非出席して欲しいとの事、承諾す。

二荒伯爵よりは、後藤子爵の他、後援の見込みなし、是非子が承諾す

る様援助を頼むと。会館にての会議にのぞみ議案を見て驚いた。全部
総裁（後藤子）の援助に依り云々とあり、如何に後藤子とてこれでは
と思われた。会議がまとまらず、後藤子入場しても、一同水をうった
る如し。

会議再開すれど進まず、二荒議長、内々に僕に説明と援助を求められ
たので何としても決まらない時は指名せられたしと云えり。

遂に二荒議長『下田君、何か方法はないか』と云う。僕は後藤子を一
寸眺めてから起立し、おもむろに『僕ならば出来る方法があるとおも
いますがねー』とだけ云った。

その一言で後藤子は忽ち三万円抛出を申し出『後は又心配しよう。知
事には私から依頼状を出そう』と。是で出場が決定した。二荒伯はお
蔭で総裁が本当に熱心になったと、飛んできて喜んだ。

次に代表者の選出方法になり、北海道からは四人参加を申し出たが、
そのうち安達勇、安達隆世の二青年は履歴上不適なりと三島子は云い、
文部省にて試験をすると云う。

僕は人格の試験が出来るならやったらよかろー

A B Cの試験なんかボーイスカウト運動には何等問題はない、後藤子
に聞いてこいと云った。二荒伯の仲裁で四人が決まった。

この時、四十度の高熱を冒しての活動で宿に着くや意識が無くなり、中野正太(注 軍隊時代の友人)夫妻が夜中に医師を呼んだり、看病してくれたそうだ。

本道からの代表者は農業青年から選抜、開拓目的の地の運動も併せた。

以上が下田が「胸のうちに在る、想いを綴り、後世に伝えたかった幾つかの秘話」だ。

今となっては関係者はほとんど生存しておらず、決して迷惑をかける事柄ではない。

事実と、真実のひとりの証人として、その当時の“いきさつ”を書き残したものと受けとめるのが妥当な判断と云えるであろう。

下田豊松は、一時的には、運動の先覚者であったが、ボーイスカウトに全く関与しない時期があった。中央の日本連盟の人事や処遇に不満を来たしていたことも窺えるが、地の運動、換言すれば、酪農にも情熱を示した時期もあったからである。

日本連盟那須野営場々長であった中村知は戦後、日本連盟の再建が一定の路線を歩みはじめた昭和30年(1955年)9月16日に倶知安に下田豊松を訪ねている。同年12月号のスカウティング誌13号に「北海道の旅日記より」と題し、——下田豊松氏のこと——として、

会見取材したことを書いている。当時の下田は、財団法人北生社理事長、後志^{シリベシ}授産場長を務めていた。

中村は「現在地元の^{アブタ}虻田第一隊（注：団号は当時なかった）を後援されているが、直接、道連、日連の加盟員になって居られない。私はどうもわりきれないものを感じたが、下田さんの曾ての役割は『先達』に値するように思うので、北海道の旅先各地で下田という先輩がいるのだというお話をして来た。」としめくくっている。（注：下田略歴では、当時すでに道連・日連の参与となっている。）

下田豊松が、何故一時期スカウト運動から離れたのかは推測にしか過ぎないことになるが、在郷軍人として指揮刀をさげ大正7年に陸軍中尉になり実に27年間後志連合分会長の任にあり、戦後公職追放となっていたことも原因の様である。

国家を愛し、少年達を愛し大地を愛した下田にとって「名誉心」や「功名心」はなかった。

中央にでて、競ってまでも役職を欲するような人柄ではなかったが故に、忘れ去られるような消息の時があったと思われる。決して下田は、誰をも恨むということは、その後も、いかなる時にも口に出さず生涯を貫いている。

「先達」の尊称は、中村知が下田に知己を得て、その人格と歩みの偉大さを語り伝え、昭和39年(1964年)に、日本連盟が授与した。再びスカウティングに呼び戻された下田は、好々爺になって、ボーイスカウト日本連盟発足当時の生き証人として重鎮の一角に座した。昭和47年(1972年)の日本連盟50周年記念表彰では北海道に於いて、ただ一人の表彰受彰者として、日本のスカウト運動史にその名を連ねたのであった。

第7章 ジャンボリーがもたらせた酪農と社会貢献

7, ジャンボリーがもたらせた酪農と社会と貢献

下田豊松のスカウト活動以外の社会奉仕は数々のエピソードを残し、ジャンボリーを契機として雄大な北海道の大地にも目を向けて足跡を刻している。

そのひとつに、アスパラガスの栽培がある。倶知安の下田農場で、弟の喜久三が改良した品種の“瑞洋”を植え、後には喜茂別の特産にまで育て上げたのであった。喜久三は、下田式純肝油の研究者でもあり、農学博士となる。四男の久雄は“ライデン西瓜”の途を開き、末弟秀雄は南米で農牧畜業で成功した。次弟は、旧制中学時代に亡くなっているが、下田兄弟のパイオニア精神は、豊松を筆頭にいずれ劣らぬ賢人たちなのだ。さて、アスパラの話が続けよう。少年団関係で世話になった宮尾舜治長官の肝入りで、喜久三を渡欧させ、研究視察の後、日本アスパラガス株式会社の設立をさせたのである。こうして、下田豊松は、本邦初のアスパラガスの缶詰化を成功させ、昭和3年3月にニセコに来道した秩父宮様にも食していただいたのである。下田一族の日本における食文化の貢献のひとつといえる。

又、第2回世界ジャンボリーに、北海道より参加した4名は全て下田豊松の後世への、戦略的推薦であったのである。なんとなれば安達勇と安達隆世はジャンボリー参加後、そのままデンマークに残留し、酪農研修をした。後年、中村耕平は、穂別村の村長に就任し、広田忠雄は石狩支庁長にまで登りつめた。2人は政治という世界で活躍した。そして、大きな視野で世の為、人の為の公僕となったのである。二人の安達は昭和2年（1927年）に帰国するまで約4年の歳月をデンマークで過ごし、酪農家として、本願寺農場に入植している。二青年が入植するまでの過程は、全て下田豊松の後援と指導によるものであった。

隆世は早世したが、勇は、荒地開拓に励み、成功させた。雪印乳業、雪印種苗、雪印物産、雪印食品の重役に就き、倶知安農協の組合長を17年間務める等、北海道酪農業界の巨星とまでうたわれる程となった。このシナリオの端緒は、下田が発掘した有望な青年像として未来を見すえたところにあった。ジャンボリー参加によつての渡欧と、酪農研修が、誰も見向きもしなかつた倶知安岩尾別の荒地を、乳流れる酪農郷とし、羊蹄山麓を蜜流れる地としたのである。下田豊松は、「酪農よ、デンマークよ、ジャンボリーよ、二人の安達よ」と叫びたくなるのだと、『倶

知安酪農の歩み』で語っている。

「公共道楽」は枚挙にいとまのない下田豊松であるが、“世話狂”とまで言われている。私設倶知安町長との呼称も、下田にとっては誇りのひとつだった。公共のためなら、どんな犠牲をも惜しまない性格であった。地政学を説き、力を入れて開発した道路は30余本を数える。ニセコ山の家から倶知安、二股間や赤井川から倶知安間の道路改修は、全て下田が提唱したのだが、かげの立役者として最後の名誉は他にゆずって、ひとり喜んで、次の目的に向けて東奔西走したのだった。“ワシは地方開発の基さえ作つてゆければ本望”というセリフは口癖のようでもあり、自らへの叱咤でもあったのである。

第2次世界大戦後に後志授産場運営のため、財団法人北生社理事長となり、引き揚者のための施設を民間人として興している。女性にミシンを10台ほどそろへ、縫製の仕事をさせた。男性には竹細工を教へ、それらの労賃は生活自立への道の糧とさせた。在郷軍人であった下田豊松は公職追放の身でありながら、外地で終戦を迎えて帰国した、敗戦国の同胞に温かい手をさしのべて、援助をした。誰もが焼土からの復興で、自らのことに精一杯の頃にである。下田の胸の内にある愛は、どのひとつ

を取っても、人間愛に満ちた姿である。下田の父は、元々は石川県の出身であり、明治18年に北海道に渡り旧加賀藩主前田利嗣侯が、旧士族授産のために起こした起業社の一員として開墾に従事したのだった。前田侯に並ぶかのごとき下田の授産場開設も知る人ぞ知る下田のエピソードのひとつに挙げることができよう。

アイデア・マン下田豊松は、観光農園の先覚者であり、元祖とも称されるだろう。

昭和5年7月2日発行の、北海道の地元紙北門日報に、『小樽旅行協会のイチゴ摘み、倶知安イチゴ園に向かう。四百名に達せば締め切り』という記事が載っているのだ。会費大人2円、小人1円50銭に含まれるものは、お土産用の籠代と汽車賃往復代、食べ放題、取り放題の大サービス。加えて昼食には、当時としては珍しかったアスパラガスの試食と新鮮な牛乳の飲料の提供。口ずてに宣伝されたこのイベントに、道産子たちは飛びついた。下田農園は超満員の盛況で、広大な丹精のイチゴ畑には、赤く熟れた実ばかりか、まだ青い実さえも、ひと粒も残らなかったというのだ。

今日では、このことに類するイベントは数多くある。梨狩り、栗拾い、リンゴのもぎとり、ぶどう狩り等々だ。だが、今から約70年近くも昔としては、画期的な企画であった。下田豊松が最初の一步を示したこのアイデアは、北海道各地で継承され、特に札幌市内のビール園に飲み放題、食べ放題、料金一律などの好影響を残していると言う。梓にはまらず、自由な創造心と人を喜ばせることにも非常に才たけていたのである。かくして農園の観光にも新たな一頁を残した。

スカウトらしいエピソードに、神仙沼の発見もある。岩内から洞爺線ドウドウの道々ルートから約700メートル、岩内郡共和町のチセヌプリ（1,135メートル）の麓に神仙沼自然休養林海拔750メートルがある。この休養林にはその名が示すように、神仙沼、大沼、長沼の火山性湖沼が点在する。神仙沼は東西150メートル、南北100メートル、水深平均2メートルである。昭和36年（1961年）発行の国土地理院発売の五万分の一の地図に、其の存在が記入されるまでは、それ迄発行の地図には記入なき沼であった。

下田豊松が、昭和3年（1928年）秋に、日本健児団の修練キャンプ地をさがしている際に発見したものである。下田ら一行は営林署長と林

務所長を含め8名であったという。

下田の記憶からの口述には、『10月6日の夜は岩雄登硫黄鉱業所に宿泊し、翌7日は大沼を経て大谷地に至り、三角鉱山沼(長沼)へ抜けて岩内町^{オイコミ}老古美に出る予定だった。道なき道は、背丈を越すほどの笹藪をヤブこぎしての大難行でしたが、どうやら湿原に出たところ、地図に記号のない小沼を発見し、そのあまりにも神秘的な景観に、一同は自然の静寂と共に声もしばしばあげることができなかった』とある。

一行はこの沼に命名しようと相談し、下田が、「みなが神、仙人の住みたもう所との印象を受けたのだから神仙沼としたらどうだろう』と発案し、一同の賛成を得て命名が成立したのだった。

野営する予定で出かけたのでは無く、装備も軽易なもので、オーバーの下で夜を明かしたということである。

先に帰った当初の8名のうちの4名が、遭難したのではと救助の相談をしていたことが発覚、新聞ダネにもなった。

10月10日の小樽新聞に『熊がお尻をなでた話』として載り、ユーモラスな話題となっている。熊にお尻をなでられたのが下田かどうか、又、野熊が出たか出なかったかは、たぶんに誇張された報道だったろうが、野

営した際にも泰然としていたのは下田だったようである。下田らの努力で、この神仙沼までの林道が開かれたのは、翌昭和4年(1929年)の日本経済の大恐慌の最中だった。名勝・神仙沼は、こうしたエピソードを背景に、春の芽吹から夏の涼を求める人々、秋の紅葉にと訪れる観光客はいま尚数多い。

しかし、下田らが沼の命名に関わったことについて、知る人々は少ない。ともすれば、偉大な人であればあるほど、エピソードは生まれ、それが語り草ともなる。

下田豊松の歩みの数々には、スカウトらしい語り草が付随する。たえず夢を追いかけている如き断面が、どの時代にも伺える。

豊かな人生の歩みだったからであろう。晩年の下田豊松は、シズ夫人との間にもうけた六男四女の子宝に恵まれた幸福を、そして若き日、英国に渡りジャンボリーに参加し、多くを学び得た幸せを思うかのように、瞑想することが、しばしばあったという。

満ち足りた顔と、紳士の国で会得した身だしなみのヒゲ剃りは怠らなかつたということも、ラジオから流れる英会話に耳をそば立てるのも下田の日課であった。

88歳の米寿の祝がなされてからは外出も控え内孫や訪れる外孫たちに、常に『人間は正直でなければいけないよ』と諭していたという。

94歳の天寿を全うした下田豊松の社会貢献は、岩内や倶知安にとどまらず、北海道にそしてボーイスカウト活動の後進たちに、多くの心に残る業績をエピソードともに忘れ得ぬものとしているのである。

人の一生には、必ず転機となるような、“ビッグ・チャンス”が一度は訪れるという。下田豊松にとっての、ビッグ・チャンスは、渡欧とジャンボリー参加である。ジャンボリーがもたらしたものの、スカウト活動を、形而上学とし規範とした、“スカウト道の実践と社会貢献”は、どの角度から検証しても“先達下田豊松の光りの路”と表現する他ないのである。

第8章 “スカウトたちへ” 朝礼の言葉

8, “スカウトたちへ” 朝礼の言葉

“おびらうしゅべつ”とはアイヌ語で“河口にがけのある所”という意味である。この“おびらうしゅべつ”と題字のある大会ニュースは、昭和47年（1972年）8月3日から6日まで北海道小平町で開催された第11回ボーイスカウト北海道大会で発行されたものだ。スカウトらがひとりひとり携える大会ハンドブックには下田豊松が揮毫した「宇宙愛」と昭和47年1月15日成人の日、八十六歳 宇宙主義者大極の文字と署名がなされ印刷されているのである。

更に「天寿訓 宇宙の大生命力に触れ、心身に充填し、天寿に力行」、
「モットー 明るく頼もしく、健やかに 備えよ 愛せよ 援けよ常に」とある。下田豊松がボーイスカウト日本連盟先達として参加した大会でスカウトたちに呼かけた久し振りでの“宇宙愛”であった。この年は札幌オリンピックの年でもあり、ボーイスカウト日本連盟の50周年の年とも重なり、下田豊松にとってなにかと忙しい年でもあったようである。

キャンプリーにおいて下田豊松は“朝の言葉”で次ぎのような話をスカウトや指導者を前にして行った。

「スカウト諸君の誠に元気、はつらつとして希望に燃えた姿を見て欣快

にたえません。私はみなさんのような立派な身体の子供では無かったのであります。生れつき病弱で、学校も落第ばかりしていました。しかし、結局人類愛に燃えて確固不拔の信念を持ってやれば、何でもできると確信をもっております。

経験によって、それ故に、その現在の世界を救うものはボーイスカウト以外にないと断言します。それだけのみなさんには責任があります。みなさんは一人一人は何千力も何万力も持っております。どうぞ元気で立派に育ち、世の中のために、また、社会のために、また、家庭のために、日に日におおいに尽しうるものと信じます。

どうぞよろしく願いいたします。」

日本連盟の先達として、この大会の顧問として、北海道におけるスカウト活動の先駆者として後進に語りかけたのだった。

この大会の野営長であった石井 博副理事長（現在、北海道連盟副連盟長）は、年齢を感じさせない下田先達の、おだやかだが力強い“朝の言葉”は今も脳裏に焼きついていると語っている。又、石井 博は歓談し、色紙に揮毫をして頂き、「弥栄」、「宇宙愛」を額に入れて、先達の歩みを記録してきた。

後年、大会の資料と共に三枚の色紙は、クニ・スカウティング ライブラリーに寄贈している。

下田豊松は、この大会の後、千歳で開かれた日本ジャンボリーも見学しているのだが、記録として残されたスカウトたちへの言葉は“おびらうしゅべつ”で開かれたこの大会でのメッセージが最後のものとなっている。

多くのスカウト達も、北海道連盟の役員や指導者たちも下田豊松の生涯を貫いたスカウト精神と“宇宙愛”を説く雅号大極に大いなる尊敬をいただいたのである。

第9章 むすびに

9,むすびに

下田豊松の「あゆみ」については、若干の知識を持っていたのだが、数年前、子息である下田真氏との全くの偶然な出会いがあった。下田豊松にとっては孫にあたる真氏の長女が私の住む町のわずか300メートルに過ぎない近隣に居住していたのだった。

こうしたことから下田真氏との交流が始まり、多くの資料の寄贈と提供を受けたのである。

数年間に亘って温めていた構想の実現となると、多くの資料と下田豊松の偉大な先達としての足跡を新たにまとめあげることには、ためらいも生じし、文章に仕上げるためには表現力の貧しさをさらさなければならぬことに恥じらいもあった。

だが、本年、日本連盟が75周年を迎えた機運のこの時こそ、ボーイスカウト日本連盟の基を築いたファウンダーである人物像を捉えられることは、意義深いことに思われてならなかったのである。

誠に稚筆ではあるが、下田豊松の歩みにふれ、下田豊松がいかなる困難や苦難にも敗けない精神力によって培われた豊かな品性を持ち、社会へ

の奉仕心を貫いたのかということ、多くの人々に伝えたいという気持ち、をいただき原稿用紙に向かったのである。

マリオ・シカ著(於保信義訳)の「FOOT STEPS OF THE FOUNDER」の“有能”という項に『“有能”という言葉で、私は単に金儲けの技術のことを意味しているのではない。一般的な知性と自由に生きる能力、それに豊かで幸福な人生を送る能力のことを意味しているのである』——ウルフカブハンドブックより——とある。

まさしく、下田豊松は、先覚者である有能さを持ちあわせていたのである。サー・ベーデン・パウエルから直接伝授されたスカウティングのノウハウはもとより、国をうれい、国を愛する純粋な国士としての下田豊松の精神は、結果的には中央の一種の圧力には太刀打ちできぬ悟りがあつたにせよ、地方に生き、知性と自由な発想に生きる能力はたぶんには有していたのである。

グローバルな発想の“宇宙愛”に表される心意気は、造語ではあるがグローバルなる下田の地方での活躍に象徴されている。下田は、“無名の初代総長”であった。しかし、下田が示し、行動した事実は確かなものであった。歴史認識をもはや塗り換える必要もないことである。75年

の歴史以前に在った、事実は霧の中に追われてしまったのだった。全てが「仮に国際登録されていた」のだとされている。

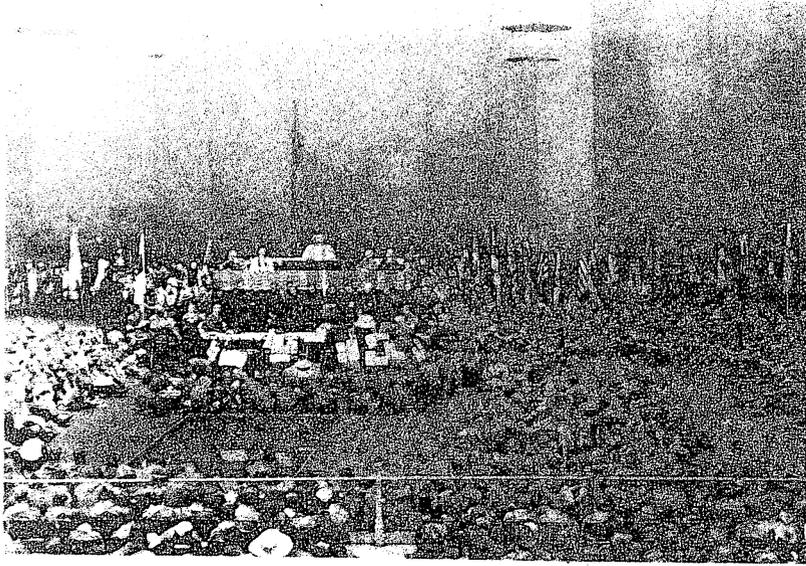
サー・ベーデン・パウエルは仮の登録を認めたのではなく、正式に第2回の国際会議の承認によったものだった事実に立てば、道を拓いた、先達下田豊松の顕彰は更に高いものであってよかったと思われる。死後、追贈で日本連盟最高功労章のきじ章が贈られても差支えなかったのではなかろうか。

名誉を再度贈って、下田豊松の墓前に報告する75周年も、歴史的にみる日本スカウト運動に於ける盟友たちの真の鎮魂歌たる友誼に厚いという美談も生まれるのではないだろうか。

私の、下田豊松観は、少なくとも、ボーイスカウト日本連盟の“無名の総長”としての存在でなく、サー・ベーデン・パウエル（世界の総長）の生の声を聞き、実践した一入の勇壮なるスカウターとしての歩みを再度賛え、忘れ得ぬ“日本のスカウティングの父”として心に残したいのである。

末尾になったが、巻末に掲げた資料と、多くのご助言を賜り、本稿をまとめる事が出来たことを関係各位に感謝をしたい。そして、日本のスカ

ウト運動が、21世紀に向かって更に発展することを祈ってやまないものである。加盟員の一員として本運動に少しく寄与できる幸福を共に多くの盟友とわかちあえることを喜びとすることも付言するものである。



Scouts Thanksgiving Service, Olympia, London, 1920

ロンドンで作られたハガキ (1920年)



ジャンボリー参加章
1国1代表へ授与
(下田家所蔵)



リチャード鈴木



(左) 下田豊松 (右) 小柴 博



東京市神田区
 寛口町七
 有馬坦秀
 杉浦藤四郎

小柴博

*T. Sugiyama,
 The Manor House
 Ewell, Surrey
 England*

東京市神田区有馬町三三

*117, Park Street, W. 1
 London*

英國駐在員
 陸軍歩兵大尉 田中靜壹

大日本帝國

杉本長三

宇宙主義者 大極

*210 Mansfield
 109 Queensgate Pavilion
 Hampstead N.W. 4*

写真・於ロンドン1920年
 名刺は当時使用された5氏のもの

下田豊松の所持パスポート ②

REPUBLIQUE FRANÇAISE

DEMANDE DE VISA DE PASSEPORT.

1° Nom: *Shimoda*

2° Prénoms: *Toyomatsu*

3° Date et lieu de naissance: *10 Mars 1898, Kito, Hirokaido (Japon)*

4° Nationalité actuelle: *Japonaise*

5° Nationalité d'origine: *Japonaise*

6° Nationalité et naturalisation, s'il y a lieu, des père et mère: *Japonaise*

7° Motifs du voyage: *tour de la France par le nord à Londres en urbes*

8° Dates du voyage: *du 15 au 25 Mars 1920*

9° Le pays où le pétitionnaire doit se rendre au moment (Prévoir de les indiquer dans leur ordre): *Marseille, Paris, Londres*

10° Prévoir d'indiquer deux adresses primaires au voyage: *Société Japonaise d'Etudes Maritimes, 100 Boulevard de la Chapelle à Paris*

11° Prévoir d'indiquer une référence par localité où se rendra le pétitionnaire: *Marseille*

12° Lieux d'entrée en France: *Marseille*

Et de sortie de France:

13° Localités où le demandeur a précédemment séjourné en France:

14° Adresses, dates et durées de ces séjours:

Shimoda, Japon, 1917

Signature: *Toyomatsu Shimoda*

AVIS IMPORTANT

Le questionnaire doit être rempli en deux exemplaires par le pétitionnaire et revêtu de sa photographie. Ces deux exemplaires peuvent être retournés par la poste à l'ambassade française des pays d'appas de visa. Toutefois le pétitionnaire devra se présenter en personne muni de son passeport et de ses papiers d'identité pour obtenir le visa, lorsqu'il sera ainsi que celui-ci lui sera délivré.

41680
Visé à Paris
21-9-20
pour le Japon via Marseille

Yours La Paix et Police
Le Chef de Bureau de la Division de l'Asie



H. B. M. General
25.8.20

21 SEP 1920
PERMIT TO LAND



Ambassade Impériale du Japon

VU A L'AMBASSADE DU JAPON A PARIS

20 Aout 1920

Visé à Paris
16 13-7-1920
pour l'Angleterre

HONG KONG
HONG KONG
POLICE

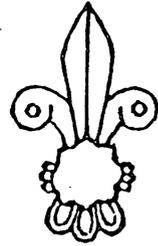
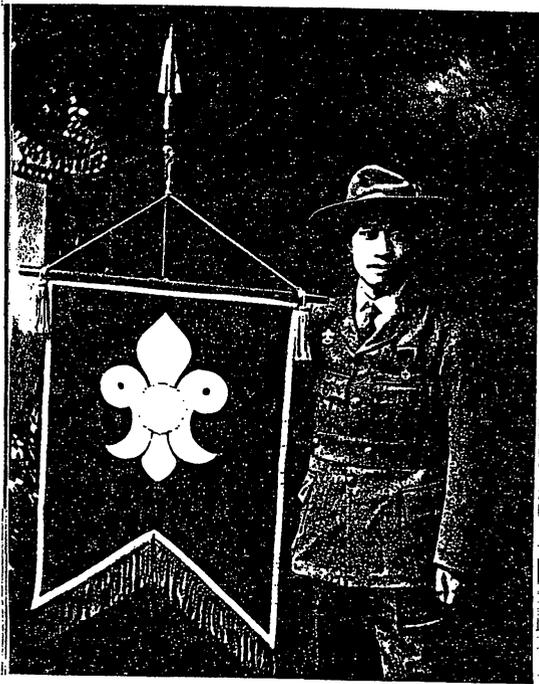
Visé at the Consulate-General of Japan at London

20 AOU 1920

19 AOUT 1920

CONSUL GENERAL

B P 卿へ送った日本健児団記章と創立記念写真
 写真左胸はジャンボリー記念章



下田制定
 日本のスカウト章

下田豊松から B-P への手紙



TOYOMATSU SHIMODA,
 IWANAI HOKKAIDO,
 JAPAN.



Aug. 26, 1921,

Mr. Robert B. Powel,
 London,

My Dear Sir:-

From your favor, I feel more liability to make our scouts prosperous, and expect to work for brethren by more strive after return of crowned prince.

I hope in near future, we may have the pleasure of welcome the Crowned Prince of England and will glad to find you here at same time.

Please find my latest picture and badge, with best wishes.
 Most respectfully,

The Boy Scouts Association

25, Buckingham palace, road , London .

S.W.I. (England?)

Mr. Robert Baden Powel.



With best wishes from
us all.

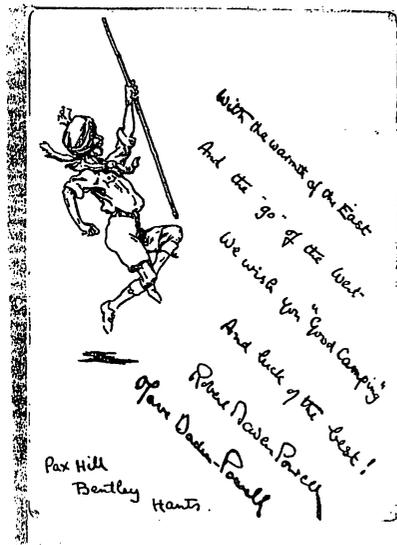
Robert Baden-Powell
Of our Baden-Powell



A Happy time to you

Robert Baden-Powell
Of our Baden-Powell

B-Pから下田豊松へ
送られた写真及びカード
(下田家所蔵)

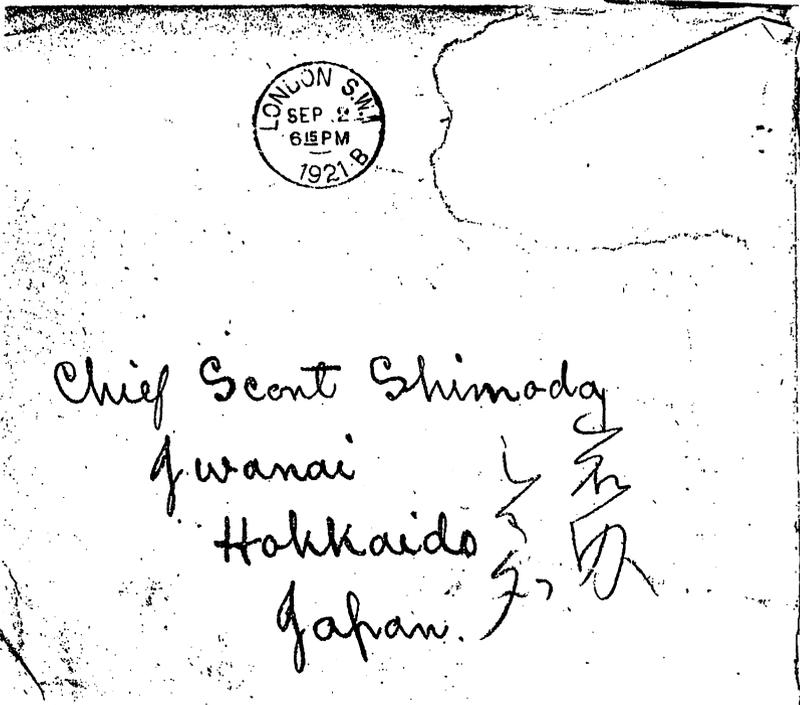


With the winds of the East
And the "go" of the West
We wish you "Good Camping"
And luck of the best!
Robert Baden-Powell
Of our Baden-Powell

Pax Hill
Bentley Hants.



Our warmest thanks
to you
Robert Baden-Powell



1921年9月2日ロンドンの国際本部発封皮
 チーフ スカウト シモダ, イワナイ ホッカイドウ

(下田家所蔵)



BRITISH EMPIRE

EXHIBITION 1922



The Chief Scout,
 Nippon Kenjidan,
 Iwanai Hokkaido,
 Japan.

日本
 健児
 団
 総長
 宛

1922年10月14日付け ロンドンの国際本部発封皮
 日本健児団総長 (下田) あての書簡 (下田家所蔵)

日本健児團

(大正十年紀元節)

一、吾々は爲さなければならぬ條件として健全な身体を所有しなければならぬ
 一、吾々は吾々がめい／＼日本男兒たる觀念から出發しなければならぬ
 一、吾々はその時代の空氣を最も正しい瞳で見なければならぬ
 一、吾々が我が日本をして合理的の安全に育て、必隨の義務を忘れずはならぬ
 一、吾々は吾々めい／＼の個性か正しい人生をつくりだすことの努力を忘れてはならぬ



徽章
 玉 — 愛の象徴
 劍 — 力の象徴
 鏡 — 智の象徴
 渾融 — 全的人格

誓
 一、吾々は誠心をもつて我が日本の健全なる發達をはかり眞愛を以て人類相互の幸福を増進する爲めに次の五項を誓つて守ります
 一、吾々は國君を尊び國を愛します
 一、吾々は吾々を育ててくれるものを敬ひます
 一、吾々は互に助け合ひます
 一、吾々は何時も正しいことに向つて歩みます
 一、吾々は吾々を守つてくれる組織を尊びます

北海道假事務所

札幌區南二條一丁目三番地創設事務所

創立者 松下豊松

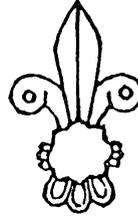
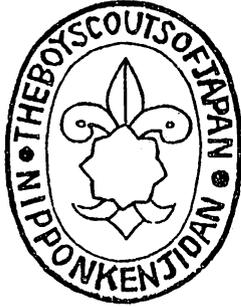
日本健児團のハガキ



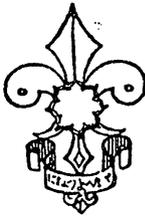
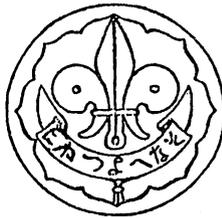
創立五週年記念 (岩内少年團)

岩内少年團創立5周年記念

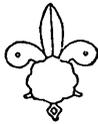
ボーイスカウト記章の変遷



下田豊松考案 日本健児団 (左)、同スカウト章 (右)



(健児章)



見習少年健児



二級少年健児



一級少年健児

少年団日本連盟 (上) 健児章 (左) 進級章



ボーイスカウト日本連盟記章 (現在使用されている)

参考文献及び資料提供者（順不同）

- 「日本ボーイスカウト運動史」
ボーイスカウト日本連盟 1973年3月25日
- 「北海道におけるボーイスカウト運動のあゆみ」
日本ボーイスカウト北海道連盟 1985年11月3日
- 「少年団の歴史」
萌文社 1996年4月15日 田中治彦 他2名
- 「PIONEER」NO, 14
日本ボーイスカウト北海道連盟 1955年3月
- 「スカウティング」NO, 13
ボーイスカウト日本連盟 1955年12月号
- 「スカウティング」NO, 41
ボーイスカウト日本連盟 1956年5月号
- 「クオリティ」ペンで書く墓碑銘 P44 1982年12月号
- 「太平洋市民」 ボーイスカウト物語・村山 有 （下田豊松の功績）
1966年春季号5月1日
- 「羽ばたけ北海道」—北海道回想録2 北海道総務部
（ボーイスカウトの先達 下田豊松）1975年3月
- 「下田豊松小伝」前田克己著
余市豆本第2集4号 1992年9月1日
- 下田真編 「下田豊松・少年団運動史」年表（資料）1977年
- 下田真編 「下田豊松・少年団関係秘話」作成（資料）1977年
- 下田豊松 「日本健児団設立ニ際シテ」（パンフレット）
1921年1月1日

○ 下田豊松 「日本健児団」 (パンフレット) 1921年

その他資料

○ 下田真所蔵「下田豊松遺稿・遺物」

○ 石井 博提供「第11回北海道大会記録——海と丘のあしあと」他

○ ボーイスカウト日本連盟資料センター所蔵図書

○ クニ・スカウティング・ライブラリー所蔵図書

「下田豊松物語」を書き終えて

日本のスカウト史を学ぶなかで、先達下田豊松の業績は、知る人ぞ知ると言った過去の歴史としての存在にしか過ぎなくなっている。

ボーイスカウト日本連盟50周年を記念して編纂された“50年史”の年表の欄に下田豊松と小柴博のユニフォーム姿の写真が載っている。後に知ったことだが、このユニフォームは英国のロンドンに渡り、二人が逃げて作ったものだった。きっと、マグネシウムライトを浴びながらロンドンの写真館で撮った一葉であろう。“50年史”では鮮明なモノクロの写真だが、残された資料はセピア色に変わり、四分の三世紀を経ての歴史を物語る写真と化している。

下田豊松のスカウティングとの関わりは、非常に興味がある歴史上の人物であるのだが、故人となっているだけに、生の取材が出来ない難点があった。下田家では豊松の資料を、よく整理し、保存している。これらの資料を快く提供して下さったことは、全く頭の下がる思いである。例えば、意匠登録したスカウト徽章に於いては、初期のものが、ひとつひとつ和紙に包まれて残されていた。第一回世界ジャンボリー参加の際に英国で求め持ち帰った当時のスカウト活動のポストカード等も、英国

に於いてすら稀少価値の高い品であろう。

下田豊松に関心を持ち、北海道余市で出版された“豆本”入手のために連絡したことから始まる下田家との交際は5年近くになる。春になると毎年のように、下田真夫妻は上京し、桜の開花を楽しまれ、千葉と東京を巡り、家族との親交を深められる。下田豊松の孫、曾孫たちとである。

そうした折に、時間と都合のある限り、私の主宰するクニ・スカウティング・ライブラリーに立寄って歓談し、時には共に食事をしたりもする。沢山の貴重な資料の寄贈を受け、感謝を表すためには、私の手によって、“下田豊松物語”を書き、墓前に捧げることが一番の報いられる手段であると考えていた。構想を随分長いあいだ温めていたが、切り口を見出すための時間が矢の如く過ぎ去ってしまったのである。結局は、平凡な記述しか出来なかったようだが、朗報が届いている。

アメリカのテキサス州ヒューストンに在住するスカウト史を研究しているNelson R. Block氏が「“無名の初代チーフスカウト”下田豊松物語」を英訳して出版しようという話である。すでに、ワープロで打たれた試稿は氏の手が届き翻訳化が進んでいる。私のつたない文

章による“下田豊松物語”は、日米両国で小冊子となり上梓されることになったのである。

不思議な出逢いだが、よき運命の出逢いとも思う昨今である。スカウト活動に付随し幾多のよきことが生成されてゆくのであろうか。ひとまず、編纂し、記述した“下田豊松物語”は下田豊松の歩みのフレームにしか過ぎないだろう。更に、重厚なそして的確なる第二、第三の研究家の手に依る“下田豊松の足跡”が記述されることを期待するものである。

そうしたことが“温故知新”であり、日本のスカウト活動の歴史的な経緯が、より明確に後世に残されることになると思う所以でもあるのだ。異例ではあるが「下田豊松物語」を書き終えて——のコメントとする次第である。

弥栄

著者略歴 小町 國市 (こまち くにいち)

- 1943年9月2日生 玉川大、日本大、早大卒業、
日大大学院修了
- 1966年 ボーイスカウト昭島第1団少年隊長
- 1997年現在 東京連盟理事・野営行事委員長
日本連盟野営行事委員
多摩川地区協議会長
昭島第1団育成会長
昭島第4団団委員長
- 趣味 スカウト切手、スカウト文献の研究
- クニ・スカウティング・ライブラリー主宰
- B-Pフェロー、アジア・太平洋スカウト財団会員
- 東京都社会福祉功労者 (1994年)
- 昭島市特別自治功労者 (1996年)
- ボーイスカウト日本連盟功労章(たか章)(1997年)
- 学校法人小町学園理事長・社会福祉法人昭島愛育会理事長

無名の初代チーフスカウト
下田豊松物語 ©1997

著者 小町 國市

発行所 クニ・スカウティング・ライブラリー

印刷 平成9年8月19日 第一刷

発行 平成9年9月2日

印刷所 シモダ・プロセス印刷所

